

vol.61 2024 秋号 源流からのたより

# ぽたい!

源流のひとしづく

手を入れつづける森

## Key Word

- 辻谷達雄さんを偲ぶ
- 都会でもできる行動がある
- 手を入れつづける森
- 「未来への風景づくり」でつながる
- 企画展「歴史の証人」
- 水のふるさとから ～ みなさんと

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

森と水の源流館

奈良県吉野郡川上村大字迫1374-1  
<https://www.genryuu.or.jp>

森と水の源流館元館長 辻谷達雄さんが去る8月8日、92歳でご逝去されました。

# 辻谷達雄さんを偲ぶ

川上村との付き合いも30年目となった。筆者と川上村との付き合いは、旧国土庁が吉野川・紀の川を対象として上下流交流調査の委員会を組織し、その委員長を依頼されたときに始まる。大滝ダムの建設問題で大揺れに揺れた川上村が、「水源地の村づくり」に舵を切った時代でもある。この時の川上村の委員が当時役場職員の坂口泰一氏と村議会副議長の故下西啓資氏だった。その委員会の現地調査で和歌山を出発点に紀の川を上流に向かい、川上村では、200年生の美しい杉の人工林を始めとして、水田農村とは全く違った、林業で生きてきた山村の姿に初めて接することができたが、若いころから過疎問題とかかわってきた私にとって大変な感動であった。この時に村を案内していただいたのが、辻谷さんとの出会いではなかったかと思う。

辻谷さんは、その名の通り、まさに山仕事の達人であった。若いころから林業のあらゆる場面を体験し、山菜をはじめ草花も熟知されていた。そして程なく、辻谷さんが「達ちゃんクラブ」という素晴らしい活動をされていることを知った。これは、山を知らない都市の人に川上に来てもらい、山を案内して山の産物を味わってもらおうという素晴らしい交流事業で、自ら立ち上げたヤマツ産業を息子に任せて始められたという。この事業の、村への貢献は計り知れぬものがあったと思う。

いよいよ大滝ダムの湛水が始まるということで、川上村が湖底フェスティバルを開催したときに、村で「歴史の証人」と名付けてきた400年生の杉の人工林まで、辻谷さんに案内してもらおうことになった。この時は家内も初めて川上村に来ていたので同行したが、彼は山に入るとすぐに手ごろな枝を見つけて家内の杖をつくってくれた。まさに達人のワザであった。家内は一昨年冥土に旅立ったが、その後ずっとその杖を大事にしていたのも、達っちゃんに関わるいい思い出である。

達っちゃん！十分に活躍されました。ゆっくりお休みください。



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 理事  
早稲田大学名誉教授 宮口侗廸

「歴史の証人」にて 後列一番左が辻谷氏  
前列左から二人目・三人目に筆者と夫人



エコバシ株式会社  
代表取締役

うえつじ かつし  
上辻 克史さん



もつ16年くらい前、森と水の源流館では

割り箸を配りはじめました。その箸袋には「このお箸を使うことは、森を守ることへつながります。」「吉野の人工林の間伐材をあなたの身の回りで利用してください。」などのメッセージが印刷されています。このような割り箸を「エコバシ」と呼んでいます。みなさんは聞いたことがありませんか？これを柱とした事業に取り組むのが、エコバシ株式会社。あらためて上辻社長にお聞きしました。

「エコバシ」とは？ポイント① 袋の中身

スーパーやコンビニでもらえるような箸袋に広告を載せる。つまり箸袋を広告媒体として利用することですが、大事なことは、箸袋の中身。かつて市場に多く出回っていた割り箸は、単価は安いですが、外国の大規模な森林伐採によってつくられたもの。「エコバシ」には、国産の間伐材の端材や、きちんと森林管理がされた樹木でつくられた割り箸のみを使用することで、無駄な森林伐採を行わず、森林資源の持続可能な利用を目指しています。

「エコバシ」とは？ポイント② 配る相手

主に大学で「環境によい割り箸」として配っています。チラシやポスター、雑誌等の紙面広告と違って、学生にダイレクトにメッセージを届けることができ、食事中に必ず手に取ってもらい、会話の話題になることも期待できるため、企業や自治体等から広告主として手があがります。企業に

森林環境のため、都会でもできる行動がある。  
それを毎日の中でつなげていきたい。

「エコバシ」で起業！

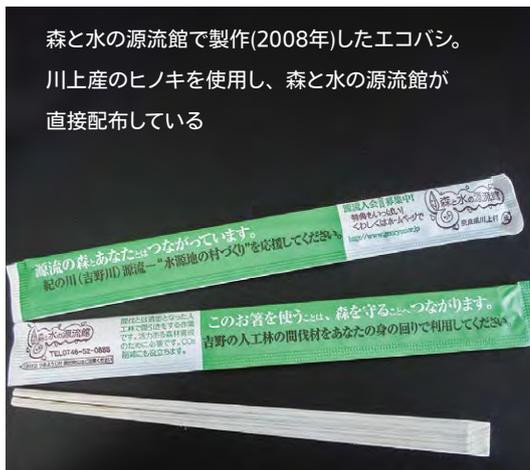
とっては広告効果だけでなく、イメージアップにつながる。大学にとっては、上質な割り箸を無料で提供を受けることができる、Win-Winの関係をもたらすビジネスモデルとなります。何より「環境への貢献」という共通する意識で双方をつなぐことが最大のポイントです。また受領した広告料の1%を「緑の募金」(公社・国土緑化推進機構)に寄付するしくみにもなっています。



多くの企業や自治体利用されている

―森と水の源流館とのかかわり

森と水の源流館でも、ただの記念品のために何か作るのももったいない。配るだけでなく、森林環境に役立つメッセージが伝わる効果を見込んで「エコバシ」を採用しました。これは当時交流していた神戸市内の高校生の発信活動をお手本にし、上辻社長を紹介してもらったことから始まりました。森と水の源流館は伝えるだけでなく、学生たちからも多くのことを教えてもらっていることを「エコバシ」を通して、マスコミで紹介いただきました。いつも川上村に来て欲しい、いっしょに森で活動してほしいと思いはしますが、それができなくても、都市では都市ならではのしくみで、森林環境に貢献する行動を考えて、実践されているということが重要なことだと思えます。





# 手を入れつづける森

―下多古村有林「歴史の証人」―

かかわりつづける人工林の存在が  
森林生態系と天然林を保全している

需要の変化にあわせた間伐材の商品化は  
魅力的な地域の暮らしと文化を育んだ

江戸時代から現在に至るまで  
間伐が行われてきた「歴史の証人」  
人が手を入れつづけることによって  
生み出された森の価値と恩恵について  
森林生態系の視点と歴史・民俗の視点から  
森と水の源流館スタッフが考察します。

日本は降水量が多いため森が成立しやすく、身近な資源である木材を用途に合わせて利用する「木の文化」を持つ国です。飛鳥・奈良時代以降の急速な都市の発展と人口増加は木材需要を増加させ、各地で乱伐による森林資源の枯渇が生まれました。このころ、川上村で始まった「木を植えて育てる」先進的な林業は、木材利用を持続可能なものとし、川上村の経済を支える産業へと発展するとともに、川上村発の優れた林業技術は全国へ広がっていきました。

集落近くでの計画的な造林は奥山での伐採を防ぎ、源流部の天然林と生態系の保全につながりました。吉野林業の特徴は「密植」「多間伐」「長伐期」です。他の林業地と比べ約3倍となる1ha当たり約1万本の苗を植え付ける「密植」により、まっすぐな木を育てます。間伐は木の成長に合わせて、良木を残して何度も繰り返し、一般的には約50年と言われている最終伐期を100年以上に延長し、真円で年輪幅が狭く均質な優良材を生産してきました。このように熟練した目利きと施業技術によって手を入れ続けられ、巨樹が並ぶようになった樹齢300年を超えるような人工林の木々の間隔は10mに1本程度となり、500年以上上手つかずの天然林「吉野川源流―水源地の森」の大木の間隔とほぼ同じになります。川上村にはこのような巨樹が並ぶ人工林が現在も約300ha残っています。間伐ごとに

「三十二番職人歌合」（1494年成立）の材木売の歌には吉野の木材が詠まれ、室町時代には吉野が有名な木材産地であったことが伺えます。伝承によると、当時の川上村では「曾木」（屋根板）を生産していたようです。江戸時代になると、酒樽の材料となるスギの需要が高まったことが契機となり、本格的にスギの生産・造林が始まりました。酒樽の材料に適した、太さが一定で年輪幅が詰まったスギを育てる林業形態「吉野林業」が成立し、太さに応じた間伐材の商品化、木材を筏にして大量輸送するための河川改修、村外の山林所有者から山林の管理を請け負う山守制度など、村人総出でスギを育てていく仕組みが整えられていきました。現在、酒樽の材料としての需要は減少しましたが、時間と手間をかけて育てられた木材は建築材としても高く評価され、国産材のブランドの一つ「吉野杉」として名を馳せています。

森の木々に刻まれた人と自然の記憶は  
つながりつづけ、未来を育む



光環境が変化する林内には草本や広葉樹が芽生え、次第に

時代の变化に合わせながら、常に木材を供給し続けてきた川上村をはじめとする吉野地域では、森林と共生する人の暮らしが営まれています。耕地が乏しいこの地域で人の暮らししていくには、森林の恵みに頼らざるを得ません。需要に合わせて屋根板から酒樽、建築材へと生業は変化していきましたが、暮らしを支えてくれる森林への感謝、自然への畏敬の念は代々受け継がれ、それが山の仕事の安全を祈り、無事に仕事ができたと感謝する「山の神」へ

平成7年、奈良県内の林業家が所有していた山林に伐採計画が持ち上がりました。村内の山守（所有者に代わり山を管理する人）から「こんな大木を伐採するのはもったいない。何とか保存できないものか」と川上村に話が持ちかけられました。吉野林業の発祥の地における文化的な遺産、そして村のシンボルとして保存することを前提に、「歴史の証人」と名付け村有林化されたこの山林には、樹齢300年以上のスギ、ヒノキの巨樹が立ち並びます。屋

中低木層が形成されていきます。広葉樹の根が横に広がることで土壌の流失を防ぎ、スギ・ヒノキの根が縦に深く根を降ろすことで土砂崩落を防ぎます。人工林は手を入れたつづけることによって土壌が安定し、天然林と同様に多くの生物を育む森となります。(K)

の信仰となりました。この「山の神」への信仰は、郷土料理や民間薬、木工品や住宅建築などと共に、吉野地域が育んだ魅力的な文化遺産と認められ、平成28(2016)年の「森に生まれ、森を育んだ人々の暮らしとこころ」美林連なる造林発祥の地「吉野」の日本遺産登録へとつながりました。(N)



## 「吉野杉」が使われつづけることで

### 都市と地域の持続的な暮らしを支える

20年毎に社殿を建て替える伊勢神宮の神事「式年遷宮」(しきねんせんぐう)の木材を伐り出す御杣山(みそまやま)は、当初は神宮近くにありましたが、資源の枯渇により次第に神宮から遠のき、室町時代以降は木曾の山中に設けられるようになりました。伊勢神宮では将来の式年遷宮に備え、大正時代から神宮林内でヒノキの植林を進めています。このように文化財の修復・復元用の木材調達は難しい問題で、興福寺中金堂の再建では国産材が確保できずアフリカ産の巨樹が用いられました。吉野神宮や檀原神宮などの戦前の大規模な神社建築でも、台湾で伐採された天然ヒノキが使われています。明治神宮の鳥居も台湾の天然ヒノキで作られていましたが、令和5年の建て替えでは川上村の「吉野杉」が使用されました。人工林の「吉野杉」に天然ヒノキと同じ価値が認められたとも言えます。

近年、都市のシンボルとなる城郭や寺院などの木造再建が盛んですが、先述したように、それらの修理・再建に使用できる木材の調達は年々難しくなっています。「吉野杉」は木曾や台湾の天然ヒノキとは異なり、需要がある限り、植えて育てて持続的に供給していくことが可能であるため、文化財建造物の修理用資材の供給に役立てる森として「歴史の証人」は文化庁から「ふるさと文化財の森」に設定されています。

国連の「持続可能な開発目標」(SDGs)の17の目標の一つ「陸の豊かさを守ろう」では持続可能な森林管理や森林の回復が挙げられ、「住み続けられるまちづくりを」という目標では都市と周辺地域がうまくつながりあうこと、文化遺産の保護などが挙げられています。「吉野杉」を文化財に使うことは、環境と文化のみならず、「吉野杉」を育てる人たちの地域を守り、都市と川上村が手を取り合っ

て持続可能なくらしを築く支えとなるのです。(N)

久島「縄文杉」が約16m、伊勢神宮「神宮杉」が約10mの幹回りなので、天然のスギから比べると小さいですが、手を入れつづけてきた森のスギとしては、日本最古と考えられる樹齢約410年、幹回り約5mのスギの巨樹が2本そびえ立っています。そして江戸時代から続く間伐が近年では平成17年と20年、令和3年に行われました。

下多古村有林の調査記録の最後は「金額云々の経済林ではなく、文化遺産的な山林として残り今後の参考資料となりうるもの」と結ばれています。江戸時代の人がここまで育てると考えて植えたのかわかりませんが、「歴史の証人」にはこれまで関わった人と自然の記憶が残っているのは確かです。林業だけでなく、村が丸となって進めている水源地の村づくりを記憶して次に伝えてくれる「歴史の証人」から樹齢約410年のスギの1本を伐採し、「吉野林業」500年の歴史を教育の場に継承するために、今年開校したかわかみ源流学園の校舎に活用しています。あと2本残る樹齢約410年のスギは、江戸時代から代々引き継がれた手入れのおかげで青々と葉を茂らせ、これからも歴史を紡ぎ続ける一方、間伐された1本は、新たな教育の場に生まれ変わり、未来を育むシンボルとして、川上村の児童・生徒とともに時を刻み始めました。

#### 参考資料

- 川上村史編纂委員会1989『川上村史』通史編
- 吉野地域日本遺産活性化協議会2017『日本遺産吉野』(パンフレット)
- 奈良県立民俗博物館(編)2007吉野山林利用の民俗誌「木を育て山に生きる」
- 辻谷達雄2018子どもたちに伝えたい源流学17『吉野林業その1』、ぱたり43号、2p。公益財団法人吉野川紀の川源流物語
- 岩永豊1970吉野林業の育林技術の成立と展開。林業試験場研究報告第231:99-170。

# 「未来への風景づくり」でつながる みなさんと

さて、今回は――

川上村では、白屋集落跡において、植栽による景観づくりをおして人の暮らしのぬくもりを伝える、「未来への風景づくり」を進めています。川上村に加え水源地の村づくりに共感する企業・団体様やシルバー人材センターとともに草刈りや植樹などを通じて景観を守り・未来につなげようとしています。これらの取り組みの様子を紹介します。



## 草刈りに感謝

旧白屋からの風景や石垣の景観を楽しむには、草刈りはとても大切な作業です。企業・団体の皆様には、毎年足を運んで、汗をかいていただいております。



## 木陰が嬉しい

企業・団体の皆様が植えていただいた木々から爽やかな木陰が生まれています。花実の華やかさも相まって、草刈り作業には絶好のお休み処になっています。

## 栗もいずれば特産品に!

農業委員会では、栗の苗木の植樹をすすめています。木の影が気にかけてですが、早く大きく育って、いずれはマロンスイーツ開発も夢?楽しみます。



## 想 い 出 ロ ー ド

## 果樹園を活用しました

かつての共同果樹園には、梅や柚、柿、栗など四季の恵みが今も残っています。今年は梅を活用した梅酒づくりの取り組みが催され、みんな収穫や仕込みを体験、恵みを感じていただきました。



ともに  
未来の風景を  
展望しよう!



## 「白屋の風景」散策

住民の方々が記録した旧白屋資源マップには、郷土への思いがいっぱい詰まっています。源流人会では、これを活用して、関わっていただいている企業・団体の方々とともに共有する「風景観察会」を企画中。“想い出ロード”として一緒に散策できる日が楽しみです。



森と水の源流館では、源流人会の方々と景観保全のための草刈りや外来種植物の駆除、自然観察会の開催などの活動を行っています。

これらの様々な活動を情報発信・共有する「カレンダー」のような仕組みを村では検討されていますので、当館でもこの運用に協力しつつ、皆様の有意義な活動につながる機会になることを願っています。

(水源地課 担当より)



事業レポート



水のふるさとから

みなさんと!

「水のふるさとに関心をもち、行動していただくみなさんがいる限り、水はみなさんに届き、海まで流れるでしょう」。そんな思いが流域の皆様に届くように、当館では様々な機会をとらえて、事業を企画・実施しています。

TOYOTA SOCIAL FES!! 2024 in NARA

主催：奈良新聞社  
共催：川上村、森と水の源流館（公益財団法人吉野川紀の川源流物語）  
協賛：トヨタ自動車



川上村では、暮らし続けるために大切な環境を守り、源流からの思いを未来へとつなぐため、川上村が全国に向け発信する川上宣言や、樹と水と人の共生をめざした水源地の村づくりに取り組んでいます。アマゴが泳ぐ清流と豊かな自然が川上村の自慢で、近年これを楽しみたいという観光客も増える一方、一部のマナー違反者によるゴミ放置が目立つようになりました。

トヨタ自動車がコンパクトカー「アクア」の販売を契機に水辺の環境を守る事業として始まったプロモーションは、楽しみながら自然を守る活動「トヨタソーシャルフェス」と名を変え、地域とともに環境保全活動をしたい方々が参加されています。

当館では、この事業の目的と参加者の思いをつなげようと、河川敷や山林周辺での火の使用、ゴミの放置、水を汚す行為を「しないでください」と啓発する村の活動を紹介しながら、清流の里散策後にアマゴのつかみどり体験と塩焼きを楽しんでいただくイベントを企画・実施しました。

散策では放置ゴミは見当たらず、参加者の方々は、地域の環境への意識の浸透を実感していただくとともに、豊かな清流も満喫していただきました。楽しい思い出とともに村の取り組みの輪が広がっていただくことを願っています。



源流分校の蔵出しツアー

当館では、源流人会や来館の方々の協力をいただきながら、企画展に向けた準備を進めています。9月には林業コーナーに活かせるものを探するため、源流人会の方々と源流分校に保管されている「山幸彦のもくもく館（川上村林業資料館）」の展示品調査に出かけました。気分は「蔵出し」です。



目当てのものは見つかりませんでした。が、あらためて、当館の運営面にも源流人会に関わっていただく大切さを感じるきっかけとなりました。10月31日から始まる企画展には、是非おいでください。

水源地の森からのSOSに募金活用

当財団では、流域の環境保全を支援するため、「森守募金」を募っています。

募金は、「水源地の森」環境保全のためのガイドブックをはじめとする啓発資料、学校に配布する学習教材冊子、土砂崩落を防ぐ木柵設置など、環境保全活動とそれらの普及啓発に役立てています。そして本年度は「水源地の森」において被害が広がるナラ枯れ対策に活用いたしました。

数年前から川上村内で確認されていたナラ枯れ被害（どんぐりの木が立ち枯れる現象）が水源地の森まで拡大しています。本来、ナラ枯れは樹林更新を促すきっかけとなりますが、ニホンジカの多い地域では下層植生が衰退し、保水能力の低下により土砂崩壊につながる恐れがあります。その対策として、後継樹の成長や植生の回復に合わせ形状を変化させ、ニホンジカの食害をコントロールする防鹿柵の効果を試行する取り組みを開始しました。



効果の検証経過は適宜お伝えさせていただきますが、全国的な課題でもあるナラ枯れ後の樹林更新対策のモデルとなるよう、ニホンジカと共存しながら下層植生を回復させる手法を研究し、継続した取り組みを行ってまいりますので、この思いにご賛同いただき、引き続き募金協力をよろしくお願いたします。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて